

短

歌

「北支戦線いろは短歌」

西村 豊三郎（七三）

い 何時も来し水汲クーリの老人に回転焼を^{あが}購ないて喰ふ（初年兵時代腹がすく）

ろ 路上行く先兵斥候狙撃され応射の機銃しきりに聞こゆ（先兵斥候）

は 腹這の匍匐^{はふく}前進くりかへし敵の陣地に手榴弾を投ぐ（敵陣地攻撃）

に 日章旗地上で振れば友軍機弾薬食糧落して帰る（友軍機の捕給）

ほ 砲兵の砲門一斉火を吹きて敵のトーチカ一瞬に^ち碎ぶ（砲兵の攻撃）

へ 兵として召され家門の名誉とぞ氏神詣で故郷を出づ（出征）

と 遠き土地黄河を越して我が頭上敵の砲弾前後に落ちる（敵黄河対岸より攻撃）

ち 父母と幼な妻子の便り読み頼に傳ふる涙をぬぐふ (内地からの便り)

り リリリリと電話機取れば襲撃と分遣隊から救援頼み (分遣隊から救援頼み)

ぬ ぬる／＼と背中にしみる戦友の血か夜襲で逝きし戦友を背にして (戦友の死体収容)

る 累々と足のふみ場の無き死体／＼破棄して敵は敗走 (敵の死体)

お 仰ぐれば朝日の如き日章旗今し陥せし城門に立つ (城門の日章旗)

わ 我が陣に敵も天晴喊声をあげて襲撃我を襲も (敵の襲撃)

か 喊声をあげて敵陣突込めば死体のこして敵兵影見ず (敵兵敗退)

よ よろ／＼とよるめきながら投降する聞けば十日も食糧喰わず (敵食糧なく投降)

た 戦かひのしばしの間隙みつめつゝ虎の子輕機関銃の分解掃除 (兵器の手入)

れ 傳令に出でし戦友武田君狙撃せられて右眼失なふ (戦友の負傷)

そ 狙撃兵眼鏡つけし小銃で重火機小火器血祭に挙ぐ (友軍狙撃兵)

つ 常日頃初年兵苛めの古兵等は弾飛くれば／＼とせり (初年兵苛めの古兵)

ね 根深葱炊けば時たま牛や豚汁が変じてすき焼もでき (野戦料理)

な 泣き女二日綴きに泣き通す哀れに思ひ御佛前送る (葬式に参列)

ら 喇叭年国の鎮めの曲を吹き戦友の遺体今茶毘に伏す (戦友の遺体火葬)

む 無理をせずじっくりかまへて作戦を良き指揮官は兵を殺さづ (将校指揮)

う 海み行かば水漬く屍と山行かば草むす屍兵は進むも (皇軍進軍)

ゐ 命より大事な小銃傷つけば歩兵銃殿とおお託するなり (三八式小銃に託)

の野も過ぎ山をも過ぎて索敵行^{あせ}出し進む幾千里 (連日行軍)

を思ふ事はつきり書かず軍事便団の親子に近況知らず (軍事便)

く呉^ふくも身体大事に忠勤を神に祈願のお百度詣で (氏神お百度詣)

や優しさと慈愛で接す民衆も家族の如く慕ひ寄るなり (中国民衆と話合)

ま松林丘の上なる迫^は撃砲陣地歩兵砲前へと隊長の呼ぶ (歩兵砲前へ)

け今日原隊から連絡ありて故郷からの慰問袋の小包受くる (故郷からの慰問袋)

ふふり向ひて弾薬渡せとその右手折れて血の吹く名誉の負傷 (骨圻貫過銃創)

こ広告や連単ビラで我が兵の戦意耗失をはかる敵軍 (敵の広告連単ビラ)

え遠々と連^み峯の綴^なきの太行山脈我が庭先と兵は勇むも (北支太行山脈)

て擲^て弾筒前へと隊長命ありて敵の頭上へ一発見舞 (擲弾筒攻撃)

あアメリカやイギリス相手に東亜戦隊長訓示で開戦を知る (大東亜戦争開戦)

さ笹餅や万頭喰つてと部落民中秋節に招かれて行く (中秋節に招かる)

き昨日迄元気に戦う戦友も今日は我が胸遺骨と成りて (戦友の遺骨)

ゆ夢に見し妻や子供の名を呼びて我手つかんで戦友は逝^ゆきにし (戦友の戦死)

め命令とあれば五尺のこの身体大君に捧げるこの時ぞなき (突撃分隊に参加)

み見事なる作戦敵の裏をかき一網打尽袋の鼠^{ねずみ} (敵を包囲)

し新年の祝宴最中非常呼集糧秣輸送敵に襲わる (新年に輸送隊襲わる)

ゑ遠々と流れ遙かな黄河にて身体衣服洗濯をする (黄河にて戦陣の垢をおとす)

ひ 非常呼集かかつて部所に取りつけば敵さん陣地にせまりつつ見ゆ (敵の陣地攻撃)

も 桃や鶏玉^{たまご}大人進上と部落民分遣隊に慰問に訪ふる (中国部落民の慰問)

せ 戦斗の殊勲者氏名君の名が隊長便り病院にて受く (隊長便り病院にて受く)

す 隙あれば歩哨線々突破して敵の動向埒る斥候 (友軍斥候)

ん 運あれば何時まみへんこの支那で身体大事に再会^{さいかい}やくす (戦友と再会役す)

(大住在住)

「短歌五首」

下川 重和 (七二)

戦争すて正義つらぬく手段なく迷へる人の心の中は

戦争は人殺しとよ人間の悟る日来るはいつのことかな

戦争は人殺しとの考えを持たざる国の多き世の中

人殺し公然とさせる戦争のなくなる時はいつにてあらむ

戦争を正義と考える人々の心おさなしあはれなるかな

(大住在住)